

思いを紡ぐ……

はじめに

人体解剖学実習は、医学部の学生諸君がはじめて御遺体に接し、その身体の構造について学ばせていただくと同時に、医の心を育て、医学の発展と、将来、立派な医師となる心構えを改めて確認させていただく極めて大切なものであります。諸君が御遺体を通じて学ばせて頂いた尊く貴重な時間を、生涯忘れないで、医学の道を歩むことを期待しています。

医学部長

解剖学科目責任者

坂部 貢

学生からのご献体者様・ご遺族様に宛てたお手紙

鈴木富美様

ご遺族様

おばあちゃん、わたしたち二十班のみんなを見てくれていますか。みんなが立派な医師になるまで、どうか見守っていてください。

「お医者さんになつてからも一緒にいますよ」そんなお声が聞こえます。そうですね、医師として実際に患者さんを診る度に思い出すのは、おばあちゃんのお身体だと思えます。美人で、とてもお綺麗なお身体でした。美しく、意志がお強く、しなやかでお優しいお姿を思い浮かべることが出来ました。浴衣も帯もとっても

似合っていて、良い旅ができましたように、心から願いながら杖を納めました。

我々学生は最終日まで、お名前をはじめ故人について一切聞かずにご献体に向かい合うことを求められます。それにより、先入観を持たず学ぶことが出来るそうです。そこで私たちの班では「おばあちゃん」と親しみを込めて呼ばせていただいています。

「おばあちゃん、ちよっとくすぐったいけどごめんね」「おばあちゃん、

「ここ痛かったでしょう」「おばあちゃん、もう大丈夫ですよ」……
人生の大先輩である富美さんに対し、このように話しかけるのは失礼かとも思いましたが、孫のような我々のこうした勝手なおしやべりを、微笑みながら聞いてくださっている気がして、たくさん話しかけていました。
実習中は、初めてのこのこと、わからな
いことだらけで頭がくらくらする程の大量の知識・見識を得ます。
おばあちゃんと一緒に学ぶことも、教科書で学ぶことも、真摯に取り組
みました。真面目に一生懸命に学び
ながらも、私たちの班は笑いの絶え

ない班でした。その笑顔の中心には
いつも富美さんがいらっしやいま
した。
お棺に納めさせていたただいたのは
つい三日前なのに、もうお会いでき
ないということがまだよく実感で
きません。最後の日、解剖学の坂部
貢教授が「君たちはこの三ヶ月半、
家族と一緒に過ごすのよりも長い
時間、御献体の皆様と共に過ごした。
私ももう数十年になるが、この解剖
の実習と御献体のことを今でも鮮
明な記憶として残っている」とおっ
しやいました。
そう、あれは昨年九月十七日、まだ
少し暑さの残る初秋の日、雨がぱら

ばらと降っていて、これから午後に
会う御献体がどんな方なのか、どの
ようにお会いすれば良いのか、不安
と緊張でいっぱいの私たちの気持
ちを表すような曇天でした。

初めてお会いした時、なんてきれい
な方なのだろうと思いました。本当
に美人で、女性として羨ましかった
です。

それから正に毎日お会いししてい
ましたね。私には息子がおりますが、
この三ヶ月は息子と同じくらしいの
時間を過ごしました。

そして、実はこの一縷の寂しさと喪
失感には理由があります。

これは班の仲間にも内緒なのです

が：私は心の中でおばあちゃんとお話を
して、日々の勉強と、試験と、プレッシャーとの闘いを打ち明け、
時には人間関係の難しさを相談して、聞
こえないおばあちゃんのお声を聞いて支え
られていました。

「大丈夫ですよ」「あきらめずにお
やりなさい」「きつとできます」「苦
しい時も、富美さんにずっと応援し
てもらっていた三ヶ月でした。

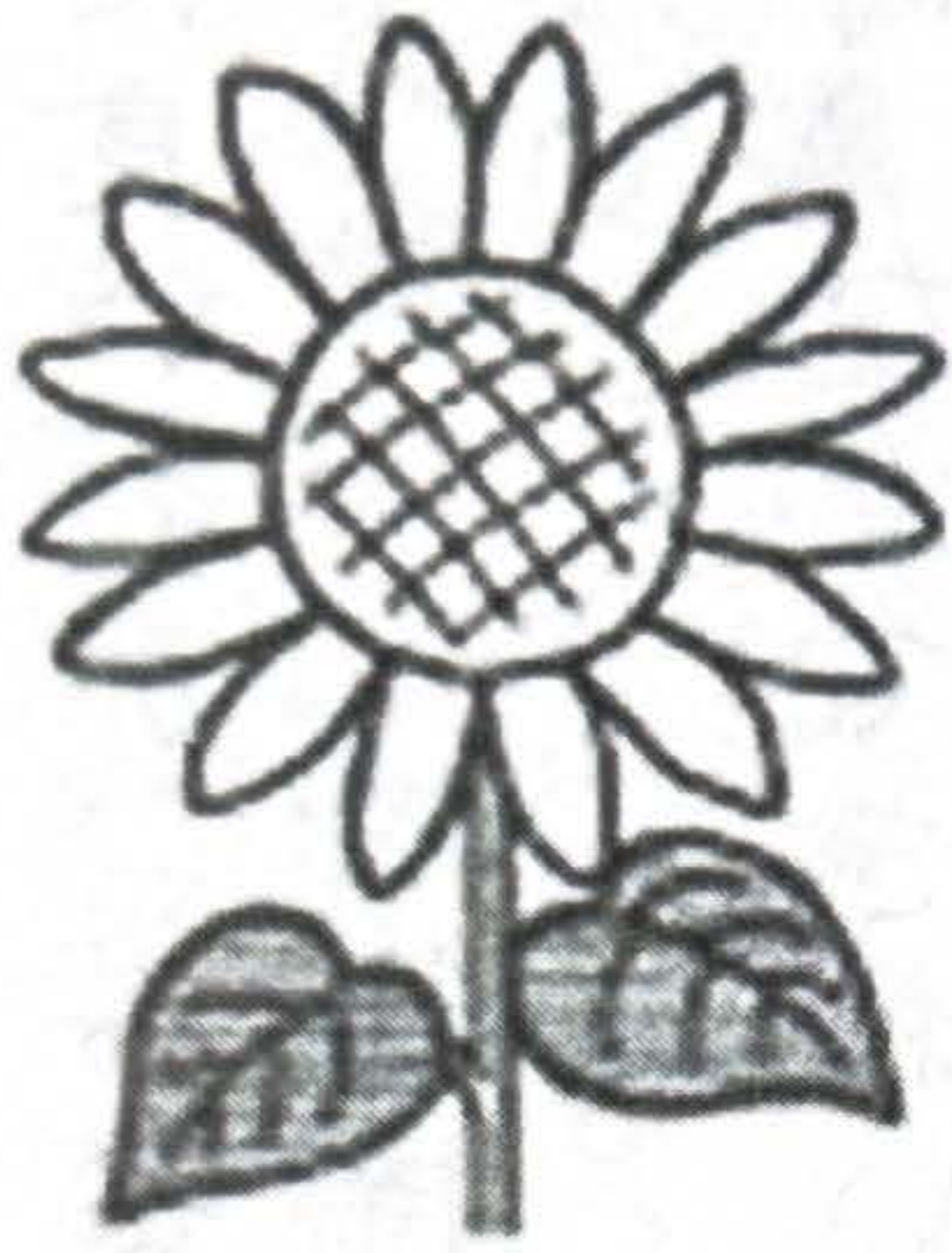
さみしいです。
でも、これからもきつと心においてく
ださると思います。

また何かあったら相談するので、あ
まり優秀でない私だけれど、どうか
踏ん張りを支えてください。

そうそう、私たち二十班は、二十五班中、七位の成績を達成しました。私たちにっては大快挙です。おばあちゃんのおかげです。これからも、五人をどうかどうか見守っていてください。

医学部医学科

近藤香光



羽坂好子様

ご遺族様

ひんやりとした解剖学教室で嗅ぐ消毒液の香りの中、私は初めて好子様に出会いました。

何の情報も与えられていませんでしたので、お顔を拝見して初めて女性だと知りました。穏やかな顔は眠っているようで、また随分お若く見え、後に本当の年齢を伺った時には驚きました。

お顔立ちも整っており、若い頃は相当な可愛らしい方だったのではいかと思いました。

名前も知らないおばあさまを見つけていると私の亡き祖母と重なり、

それと共にある記憶が鮮明に蘇りました。

祖母は、生前献体をしたと言いつたことがあったのです。

当時すぐに家族会議が開かれました。しかし私達は、祖母の意志を尊重してあげられませんでした。家族として割り切れない感情があり積極的に賛同できず、『普通』の葬儀・供養の流れではなくなり別れを惜しむプロセスが変容してしまうことを恐れたのかもしれない。結局、祖母は『みんなの反対を押し切つてまでには出来ない』と諦めました。

後年、癌を患った祖母は、自分自身で事前に葬儀の手配まで終え、亡くなりました。気丈な祖母が相談してくれた時には熟考の上だったろうに、意志を尊重出来なかったことはいつも心のどこかに引っかかっておりました。当時は医学生になることなど思いもよらなかった私が、今回改めて献体について考える機会を頂いたことに不思議な巡り合わせを感じました。医学の進歩の為に貢献されたご本人の意志も勿論ですが、同意されたご家族も素晴らしいと思います。

私の家族は昔、解剖を経験させて頂いた立場でしたが、お葬式から納骨

まで一連の流れの中でゆっくりと別れを惜しみたい、亡くなって間もない中に献体手続きをしたり、お骨の返却が数年後になるかもしれない中で悲しみを乗り越えられるのか・・・そんな不安感や身内の情、しきたりを重んじる田舎であること等様々な思いに邪魔をされ、一番大切な本人の意志を尊重出来ませんでした。同じように誰かの家族であり、献体の是非について家族会議を開いたであろうご遺族の思いが、解剖実習中もずっと気になっておりました。私との違いは何だったのだろうか。

好子様はどんな人生を送られたの

でしようか。献体を決意された切掛けは何だったのでしょうか。様々なことを想像しては日々、心の中で語り掛けておりました。

初めて対面させて頂いた時から、不安はありつつも精一杯実習に取り組み、出来る限り多くを学び吸収しなければと勉学に対する決意が生まれましたし、献体して下さった崇高なるご意志に背かぬよう努力する責任があるのだと実感いたしました。

初めてお体にメスを入れる際には随分勇気が必要でしたが、改めて医師になる覚悟が出来たように思います。医学部生と歯学部にか許さ

れていない解剖という実習は、この覚悟を生むためにあるのかもしれないと感じました。

標本や模型では決して得られない経験です。また、血管や神経の位置等は人によって異なり、人体にも個性があるのだと知りました。教科書で学ぶだけでは気づくこともなかったでしょう。

最終日、納棺の際に初めてお名前を伺い、最後に一輪ずつ献花した時には様々な思いが胸に込み上げました。

実習からは本当に多くの貴重なものを得ることが出来たと思ってお

ります。

人体の興味深さ、解剖の難しさ、班員との共同作業を通じた信頼と協力、慰霊祭で感じた感謝や敬意等、数え切れないほどです。

今後医師を目指していく上で、なれたならばその後も、この経験や感じたことは決して忘れず生きる糧になるでしょう。

普通親族であつても、亡くなった後に一緒に過ごせる時間は長くて数日しかありません。

私は好子様と、数か月の長きに渡って密度の濃い時間を一緒に過ごさせて頂きました。お顔もお名前も一生忘れることはありません。

好子様とご遺族様が、献体という葛藤も伴う大きな決断をされ、医師の育成の為・医学と医療の発展の為に解剖をお許しくださったことに、心から感謝しております。本当に有り難うございました。

医学部医学科

武本友里恵

伊藤奈都美様
御遺族様

うだるような暑さとたまの夏疾風を身に感じていると、まだ、夏の気配など微塵もなく、桜が散るばかりだった頃を思い出します。

春から始まりました解剖実習、およそ四ヶ月間の中で、伊藤様は私や他の班員に様々なことを教えて下さりました。書籍だけでは理解できなかった人体の実際について、物事をなす上でのチームワークの重要さ、それらは、伊藤様の導きの元、学ぶことができたものだと思っております。ですの、ここからは勝手ながら、是非、先生とお呼びさせて頂

ければと存じます。

先生とご一緒する日々は『人生と生死について』考える日々でもありました。お体に残る様々な跡を拝見しながら、先生がどのような人生を送られたのか、どのように亡くなられたのかを想像致しました。どのような家族がいらして、どのように過ごされ、お別れをされたのかも想像致しました。そうして最後、先生をお見送りさせて頂く際に、先生ご自身と御遺族様が署名なされている献体同意書を拝見し、今、強く意識しております。人間ひとりの人生は、

その方の生死ということに終始するのみならず、その方のご家族や周囲の方々に深く関わりがあるのだということを知りながら、私は、先生のご家族様と“大切なご家族様”を解剖したのだと。

大切なご家族様を献体として送り出される、という別れ方が、普通とは異なるものであるうとは考えがつくのです。

しかし、大切な方との、“死”という“一度目の別れ”の後、いつ帰ってくるともわからぬまま、我々の元へと見送る“二度目の別れ”を経験するということが御遺族様にとっ

てどれだけ辛いものであるか、察するに余りある、という一言より申し上げることができません。否、正直に申し上げれば、余りがありすぎて、察することもできぬまま、ただただ苦しい思いでおります。確かに、私にとって、この四ヶ月間は、骨や筋肉、神経、脈管等がいかに秩序立てられていくかという生命の奇跡に触れることができ、楽しく実りある時間でありました。一方で、御遺族様が、共に人生を歩んだ方を、その帰りを待ちわびていらっしやるだろう方を、解剖させていただき、私たちの手で納棺させていただく、ということに迷いがあったのも事実

です。先生、先生にとって、最期の後の、本当の人生の終わり、このよ
うな形でよろしかったでしょうか。

るのが、本当に寂しく思われます。
ありがとうございます。どうか安
らかにあられますよう。

ただ、確信を持って申し上げられる
のは、この実習は、大切な方をご献
体として送り出すという御遺族様
の大切な決断がなければ、間違いな
く待ち得ない機会であったという
ことです。厚く御礼申し上げます。
私がこの先医師となって、様々な患
者さんを診る中で、必ず思い出すの
は先生のことでしょう。医学の為に
と尊い御遺志を示して下さった先
生に恥じることはないよう、良医へ
の道を進んでいきたく存じます。
伊藤奈都美先生、これでお別れとな

医学部医学科

近藤朝子

橋本 健様

日ごとに冬の気配が深まってまいりました。空は澄み、丹沢の山々も雪化粧を始めております。

昨年秋から今年にかけて、私は橋本先生からとても多くのことを教わりました。机上の学問を実体験と結びつける勉強法、人間関係の構築法、死生観、その他の言葉では言い表せない沢山の事。これらのご事を、私に根付かせてくださった橋本先生にまずは厚くお礼申し上げます。く思います。

個人的な事柄をお話しますと、私は橋本先生を思うと三つのことがまず頭に浮かびます。

一つ目は解剖学の知識、次に仲間の勉学に対する強い情熱、そして趣味の登山のことです。

私は、解剖学の実習が始まるまで仲間がどのような姿勢で勉学に臨んでいるのか全く知りませんでした。解剖学の実習は、長期間に渡り、班で行うものですから、実習を行うにつれて班の仲間をよく知るようになりました。ほとんどの場合、実習は毎日三〜六時間行うのですが班の仲間は本当によく予習をします。淡々と、毎日毎日熱心に勉強する姿

からは医学への情熱と橋本先生への敬いが伝わってきました。それは、言葉だけでは決して作れない真摯な姿勢でした。私はそれを肌で感じ、背筋を正される思いでした。

また、私は趣味で登山を行っており、そして山に行く度に死の危険について考えます。

今、私が死んだら仲間が死んだらどうなるのか、どんな気持ちになるのか、いつもいつも考えます。

橋本先生はどのようなお気持ちで御献体をされたのか、想像することしかできません。

しかし、私は死の危険について考える時に、先生との一体感を覚えます。

そして、仲間の真摯な姿勢、橋本先生が教えてくださったことを考え、決して事故を起こしてはならないという気持ちになるのです。

東海大学からは丹沢の山々がよく見えます。真っ直ぐな尾根や稜線が輝く光景はとても美しいです。私はこの景色と共に、橋本先生のことや解剖学実習の思い出を強く記憶に刻んでおります。

医学部医学科

鳥居弘美



橋本健様ならびに
ご家族の皆様へ

私は、編入生としてこの東海大学に入学を許可頂き、二度目の大学生活として勉強させていだいておられます。医師になろうと思ったのは、自分が出産した際に切迫早産となり、小さく産まれた我が子を小児科の先生に助けけていだいたことがきっかけでした。

それまでは医療機器メーカーで、新しい医療機器を開発する仕事をしておりました。医療に関わる仕事をしていたため、小児科の先生方が人手不足の中、献身的な心でお仕事をさ

れているのを存じておりました。お忙しい中、赤ちゃんに生きる手助けをして下さり、保育器の中でスクスクと育っていく我が子を見て心から医師や看護師の方々に感謝を申し上げ、自分も助けけていだいた恩を返したいと思ったのです。こうして勉強する機会をいただき、先生方や友人、家族に支えられながら、学生生活を送っております。

解剖実習は先生方のご配慮から、橋本様のお名前も何も知らされないで始まりました。私達の班では、ヒトの身体について何よりも真実を教えてくださる先

生だと考えましたので、尊敬の気持ちも込めて、「先生」と橋本様のことを呼んでおりました。

この文中でもいつもの通り「先生」とお呼びすることをお許し下さい。実習の始まる前、発生学の勉強をしていたことや、自分が母となって医師を目指したこともあり、ヒトの身体が母のお腹の中で形作られる神秘について、そして目の前にいる「先生」もお母様のお腹の中で誕生してきたということ、お母様が愛おしいと思いつながらお育てになったこと、「先生」ご自身が何十年も大切にされてきたお身体、そしてそれを支えられてきたご家族のこと、目

の前にいる先生に我が子を、自身を、そして父親の姿を重ねて勉強させていただけました。

子育てをしながらの学生生活で、家に帰ってから集中して勉強する時間を作るのが難しい日々でしたが、「先生」の傍にいるときは、勉強に集中出来ましたし、いつも「先生」が応援してくださっているようでした。

きっとお優しい方であったのではないかと想像しておりました。

「先生」に教えていただいた身体のもっとも大切なこと、命について考えたことは一生忘れられることはないと思います。

夢を叶え、小児科医となったときに、病気の子どもたちのどこに病気があるのか？身体の中のどこを治療したら良いのか？

それを考えるときはいつも、先生の姿を通して考えていくと思います。不運にも病気になってしまった子どもたちには、不幸だと考えさせないような医師になりたい、幸せだと思える子どもたちに未来を託せる医師になりたいと思います。

長い間、「先生」のお帰りを待ちわびていたご家族の皆様を思うと、感謝の気持で胸がいっぱいになります。

このような貴重な機会をいただき、

心からお礼申し上げます。これからも勉強させていただいたことを忘れず、病を療し、幸せにする医師になりたいと思います。

医学部医学科

犬飼佳織



ご遺族の方々へ

私達の班では、橋本様を『先生』と呼んで作業を進めました。なぜ先生なのかというと、体の構造を教えてくれる、いわば私達の班の教科書のような存在だったからです。体をひっくり返す時など、「先生をひっくり返すよー」とか「先生を少し下へ、ずらそうか」とか単純に「ご遺体」として扱う事はしませんでした。実習中は作業とテスト対策で精一杯でしたが、ふと先生の顔を見ると、それはそれは、とても安らかな顔をしていました。先生の表情は、「雑には扱うなよ」とか、「勉強頑張れ

よ」とか、まるで近所の親しみやすいおじさんのような印象がありました。この人のおかげで作業は丁寧に進める事が出来ました。

私はこの実習を通してたくさんの知識を身に付け、それらを立体的にイメージする事ができました。しかし、私が知識以外に得たものとして大事だなどと思った事があります。それは、『人の死に慣れない事の大切さ』です。

私はまだ医者ではありませんが、将来医者になった時、患者を助ける事ができたりする反面、助ける事の出

来ない状況に直面する状況もある
かもしれません。自分が関わって
なくても、人間が亡くなる事に対し、
まるで仕方なかったような理由を
つくって達観してしまふようにな
るのではないかと、将来、
一番心配です。

この実習では先生を見て感情が高
ぶる事はありませんでしたが、納棺
の日に改めて先生を見て、この四ヶ
月間を振り返ると、この人がここに
いてくれた事のありがたみが、理屈
では表せない気持ちとなって、重く
背中へのしかかりました。
それは同時に責任感のようにも感
じました。

このような様々な感情がのしかか
り、考えさせる事が医者にとって大
事な姿勢なのかなと感じました。
なので、今後も勉強は精一杯に頑張
ろうと改めて思いました。

橋本健様という先生が私達の班の
将来の為に貢献される事を許し
てくれてありがとうございます。先
生のご冥福と、ご遺族のみなさんが
今後とも元気に過ごせるようお祈り
します。

医学部医学科
齊藤俊明

江川静子様
ご遺族様

立秋を前にしてまだ暑い日が続いておりましたが、いかがお過ごしでしょうか。

五月上旬より始まった実習も先月末に無事終わりを迎えることができました。

とても内容が濃く、あっという間の三ヶ月でした。

実習開始時、目の前にいる方は人生で初めて受け持つ患者さんと先生が仰っていたことがとても印象に残っております。実際、医療現場では患者さんの話を聞き、気持ちに寄

り添うこと、また同時に、バックグラウンドを知り個人レベルに合う治療法を決めるということが行われていきます。

まさに今回、患者さんのバックグラウンドを考えるとということの大切さを学びました。実習を進めていく中で、身体の中の状態を知りました。特に内臓脂肪が少なく、とても健康的な方だということが分かった時、どのような食生活、運動をされていたのか。こだわりの健康法をお持ちだったのではないか。きっと長生きされていたのではないか。等、様々

なことが班員同士で自然と話題になりました。そして、実習後半、ご年齢やお名前、そしてどのような人生を歩まれてきたかを知る機会がありました。実習中、班の仲間と静子さんの人生に思いを馳せていたのを思い出すと同時に、想像をはるか上回るほど活力に満ちあふれた静子さんの生涯を知り、驚き感銘を受けました。もし、静子さんがご健在であったならば、直接七十歳までの仕事の続け方、健康でいる秘訣、そして人生の大先輩からの教訓を是非お聞きしたかったです。

静子さんの『生涯現役』という達筆

な力強い文字からご献体になってくださったお気持ちを垣間見たように思いました。体内の仕組みはもちろん、チームとして班員と協力していくことの大変さと大切さなど多くのことを学ばせて頂きました。実習中に感じ、学んだことを忘れず、今後とも精進していきたいと思えます。どうか安らかな旅立ちでありますよう心からお祈りいたします。

医学部医学科
渡部育子

私たちは、四月から八月までの間の五ヵ月に渡って解剖学実習をさせて頂きました。解剖学は教科書だけでは勉強では得ることの出来ない部分があると感じました。そこで解剖学実習を経験した今、その意味と学んだことを書いていきたいと思います。

私を感じたものとしては大きく三つあります。

一つ目は知識より明確に記憶に残すことが出来るということです。

解剖学は教科書にして千ページの分量があり、これらを五ヶ月間で整理し、定着させる必要があります。

しかし、人体は立体的であり、今日の流れとして臨床でも術野がとも狭くなってきました。従って体表を見た時に、何がどこにあり、その厚さはどれ程なのかといったことを知らなければなりません。その為、一度実習をさせて頂き、実際に触れて感じられる機会はとても貴重でした。

二つ目は、班で実習を行った事で他の人と連係して物事を進めていくチームワークを身に付ける事が出来ました。実習は一班六人で、実習書を用いて行われます。その為事前の予習、計画を立てて協力して進め

て行きます。医療は様々な専門の人々と関係を取りながら進めて行きますが、実習でもそれぞれの長所を活かしながら、又、複数人で同時に実習を行う為それぞれの知識に傾きがでないように情報共有をしながら行うといった事が必要でした。この事に意識して行った結果としてですが全ての試験において最優秀班となりました。

最後に今回の実習で一番学ばせて頂いた事が生死観や論理感です。実習初日、礼に始まって対面した時、やはり緊張を覚えながらおぼつかない手つきで実習をしていました。

亡くなった年も近く、最近までこの人は近くで生活されていたんだと思うと、死というものは何なのかと考える事もよくありました。実習も自分の手で進めて行くので夜目をつぶると実習中の画が瞼の裏にうつる事もありました。このように生死観について深く考えた日々もある反面、一、二カ月も経つと実習をスムーズに行えるようになり、また、膨大な知識量を必死に詰め込む事に忙しく最初の頃にあった緊張感に慣れてきている自分に気がきました。初心忘れるべからずとは、この事だと思ったのと同時にその難しさ、医師を志す身としてその必要

性を感じました。

献体の全てを解剖実習でできるのは
世界でも数少ないです。この機会を
与えて下さいました献体者様とそ
のご親族様に感謝を申し上げます。

医学部医学科

三木崇充

江川静子様
ご遺族様

土用明けの暑さ一段と厳しき折から、なお一層ご活躍のことと拝察いたしております。

実習という貴重な機会を与えていただきましたことを深く敬意をもつて、感謝申し上げます。

本当にありがとうございます。ご遺族の皆様におかれては、静子様ご本人の意思を尊重されてのことだとしても、大切なご家族を献体へ送り出すことに葛藤もあつたのかもしれません。その想いも併せ、受け取りたいとこれまで実習に励んで

まいりました。

たった数ヶ月の短い間でしたが、ここ数日静子様にお会いできないことが寂しく感じます。

別れ際、握った手にどことなく温かさを感じたように思いました。私の初めての患者様になっていただいたことに感謝が尽きません。

この実習を通じて、医学的知識以上に多くの大切な事を学ばせていただきました。

これから医療従事者を目指す身として、特に二つのことが心に残りました。

患者様に思いをはせること、そして

患者様の思いを受け取ることの意味について考えることです。

実習でお会いする毎に、静子様が多様な人生を過ごしてこられたのだろうか、思わなかった日は無かったように思います。ご遺族からのお手紙を拝見しましたところ、戦前のお生まれとのこと。戦中戦後の日本を生きてこられ、貧しさや辛いこともあったであろうに、ご献体としてその身を社会へ奉仕された精神性はどのようなに成されたのだろうか。若くしてご主人との死別の辛さはどれ程のものだったろうか。ご主人と同じご献体という選択をされたことに特別な想いがあったのだろうか。

うか。どのようなモチベーションで七十歳まで現役でお仕事に取り組みられていたのか。静子様とお話しできたらと思うことが尽きませんでした。私のこれまでの人生でこれほど身近に感じながらその人生に思いをはせたことはありませんでした。まだまだ至らないことばかりですがこの経験を心に刻み、医師になった後、患者様への理解につなげていけるように精進していきたいと思えます。

私はボランティア活動でアフリカに滞在中、多くの患者様に助けられた経験から医師を志すようになり

ました。卒業後は再びアフリカや中東などに赴き、恵まれない方々に医療を届けていくことが私の目標です。静子様から受け取った貴重な想いを次の待っている人へと運んでいくことが私の使命の一つであり、頂いた想いは止めず、次の人へとつなげていくことでこの感謝を伝えていきたいと思えます。これからも人として、医師として学ばなくてはいけないことは尽きませんが、想いによって紡がれた一人として責任と自覚をもって勉学に励んでまいります。

医学部医学科

小林誠之



松崎公彦様

ご遺族の皆様

梅雨が明け、夏本番になってまいりました。松崎公彦様のご遺族の皆様におかれましてはお健やかに過ごしの事と存じます。

私は幼い頃から医師を目指しておりますが、『生きること』『死ぬこと』にきちんと向き合ったことがなく、解剖実習が初めての機会でした。約半年間の実習では、献体という大きな決断をしてくださった松崎様に失礼のないよう、できる限り多くのことを学ぼうと実習に励んでまいりました。松崎様のおかげで今まで

は図でしか見たことのなかった人体の構造をたくさん勉強することができました。松崎様は私が診た最初の患者様として今後の勉強に活かしていきたいと思っております。

生前は音楽がお好きでいらしたということですが、私も幼い頃からこれこれ二十年近くピアノを弾いております。お手紙は納棺の日に拝見したのですが、松崎様と音楽の話をすることができたなら楽しかっただろうなという思いをはせながらご遺族の皆様に取り変わり、納棺させていただけました。さらに、天国でも音

楽に囲まれていらっしやることを願っております。

この度は、私達の勉強のためにご献体していただき、誠にありがとうございますございました。松崎様のご冥福とご遺族の皆様のご健康をお祈りしております。そして、私は皆様への感謝の気持ちを胸により一層勉学に励み、良い医師になれるよう精進してまいります。

医学部医学科

関野利紗

御献体くださった方へ

毎日のように私たちを見守り人体の構造について教えてくださりありがとうございます。

あなたの尊いご遺志のおかげで私は教科書や図版だけでは決して理解出来なかった様々な学びがありました。私は解剖実習が一番好きない科目で、毎日予習して、実際に確認する作業が楽しみでした。その日にはある神経が見つからなくても、実習後の学習を終えた後、明日はどこどここの間を探せば良いか考えながら眠りにつくこともしばしばでした。

また、特に剖出が難しい構造を上手に剖出できたときは、素直に嬉しくて、友人にあなたを自慢し、「次も頑張るぞ」という気持ちになりました。

さらに、教科書が章立てにして別々の箇所には描写している様々なものが、実際のあなたでは、隣同士に存在していてびっくりすることもありました。

私たちは将来医師としてあなたのような現実の人間を相手にするのであって、決して理論上の教科書ですべてを記述できる像を相手にす

るのではありません。あなたは私にとって最高の解剖学の先生でした。本当にありがとうございます。私の解剖作業を体で感じていたあなたに私の熱意と感謝が伝わっていただければとても嬉しいです。

解剖実習が終わってから、配布された実習の指針を読み直しました。

そこにはご遺体の細胞ひとつさえも、もとに戻してご遺族にお返ししなければなりません。細胞ひとつまでその方のもので、それをなくしてしまふことは厳密には死体遺棄であると書かれています。

私は死体遺棄という言葉を目にし、

自分たちの行っていた解剖実習がきわめて特権的であり、責任を伴うものだったことを改めて思い出しました。私があなたの解剖を担当させて頂くことができましたのは、私が医学生だからであり、医学生としての自覚をもたない私であれば、本来ならば犯罪ともいえません。しかし、考えてみれば、それは解剖実習だけではなく、医師としての医療行為はすべて、誤れば危害を加え、罰せられることです。そう思いましても、解剖実習はただ知識をつけるものではなく、はじめて医師としての責任感を試される専門科目であり、あなたは私の思い出深い初めて

の患者さんでした。

私はご献体されたあなたのご遺志を無下にしないように、真摯に解剖実習に取り組みました。しかし、本来どういう態度で実習に臨むのがよいのか分からなかったというのが正直な気持ちです。神妙な顔をしながら厳粛に作業に取り組むのが正解なのか、孫のような年の私です、元気にのびのびと学んでいるのを微笑ましく思ってください。いたのか、あなたはどんな方だったのでしょうか、あなたをはじめて思いがおよびました。

ご献体を希望される方です、徳が高くお優しい方だったに違いないと思うこともあれば、ものごと厳し

く人類の発展に義務感をもつていらしたのかもかもしれません。私は完璧な学生ではなかったかもしれませんが。それでも心からあなたがご自分の崇高なご遺志に満足されていることを願ってやみません。

納棺の日には、あなたの家族について考えました。私たちは、ご遺族にかわって釘打ちの儀を執り行いましたが、亡くなったあなたの弔いを私たちの解剖実習のために待たれていたことにはじめて思いがおよびました。

私はまだ自分の近しい家族を亡くしたことはありませんので、そのつ

らさはなかなか分かりません。しかし、小学生のときに寝たきりで意識があるのかもよく分からなかった。曾祖母が亡くなりました。そのときに泣いたのを見たことがなかった。父が涙を流しているのを見て、もともと生きているようにも思えなかった。曾祖母の様な方も、本当に人が亡くなるということは、心を揺さぶることなんだと感じたのを覚えています。

また、やはり小学生の頃でしたか、臓器提供カードを学校からもらってきたときのことを思い出しました。死んだら使わないんだから人の役に立った方が良い、みんなも褒め

てくれると思って臓器提供カードの署名を食卓でしていました。

すると母が気づいて、そんなのはやめてほしい、死んでも私の一部がどこか知らないところへ行ってしまうのは嫌だと言われました。こういう体験を思い出しながら、思いますのは、亡くなればそこで周りの方々の関係性が切れるのではなく、むしろ亡くなったときに、ご遺体はその方を偲ぶことのできる最大の遺品なのだと思います。そのご遺体をご葬儀し、人は少しずつお別れしていくのだと思います。そういう気持ちをしずめる儀式の一部を私たちに譲ってください。あなたとその

ご家族、ご家族は最後にお顔をご覧
になることもないのだなあとと思う

いままで本当にどうもありがとう
ございました。

と、ご献体の自己犠牲は、私が思っ
ていた以上に尊いものだったと今
更ながらに感じました。私はいま、
とても寂しい気持ちでいます。けれ
ども、私はあなたのご家族がまたあ
なたにお会いして、誇らしげに、『よ
く頑張ったね。学生さんもたくさん
学ばせてもらってあなたのおかげ
できっと立派な医者になるよ』とい
うような言葉をかけてもらってい
ればいいなと思います。
私もあなたが担当されたことを誇
りに思うような立派な医師になれ
るように頑張ります。

医学部医学科

佐久間真紀

秋山ミツ子様

九月の中頃、私達が初めて秋山さんと出会った日、秋山さんの表情はとても穏やかで眠っているようでした。唇に引かれた紅がとても似合っていました。綺麗だったのを覚えています。

最初の実習の時は、この方を本当に解剖して良いのかと戸惑い、緊張で手が震えました。実習を進めていく中で、次に抱いた感情は、驚きと感動でした。教科書や図説を読み想像していたものとは全く違っており、実物を見て、触れることで、私達の

人体に対する理解は深まっていました。

また、私達は実習で人体の構造を学ぶのと共に、秋山ミツ子さんと言う一人の人とも向かい合ってきた。秋山さんが生前どのような人でも、どのような人生を送り、どのような最期の時を迎えたのか。しばしば思いを馳せました。

献体を決断することは並大抵の覚悟ではできないことだと思います。たくさんの悩みも不安もあったのでしよう。また、御家族の方も秋山さんの決断を受け入れることはそう容易なことではなかったと思います。

私達は、そんな秋山さんにご遺族の方々の覚悟と勇気を真摯に受け止め、五ヶ月間、それに報いるために勉強してきました。

実習期間中、辛くなることがあっても頑張ってこれたのは秋山さんのおかげです。

実習最終日、納棺の時に秋山さんが亡くられる前に書かれた手紙を読ませていただきました。

自分が病気で辛く、怖い思いをしていただけのように、それでも私達のことを励ましてくれる言葉を綴ってくれたことに胸が熱くなりました。

秋山さんの強さと優しさを心から尊敬します。

秋山さんには、本当に感謝の念しか

ありません。

秋山さんがいたからこそ、私達は医師への道を更に先へ進んで行けます。

実習は終わってしまいましたが、秋山さんの存在は私達の胸に在り続けます。

必ず良い医師になると貴女に誓います。

これからは、天国から貴女の大切な方々を見守ってあげて下さい。

最後に、本当に、本当に有り難うございました。

医学部医学科

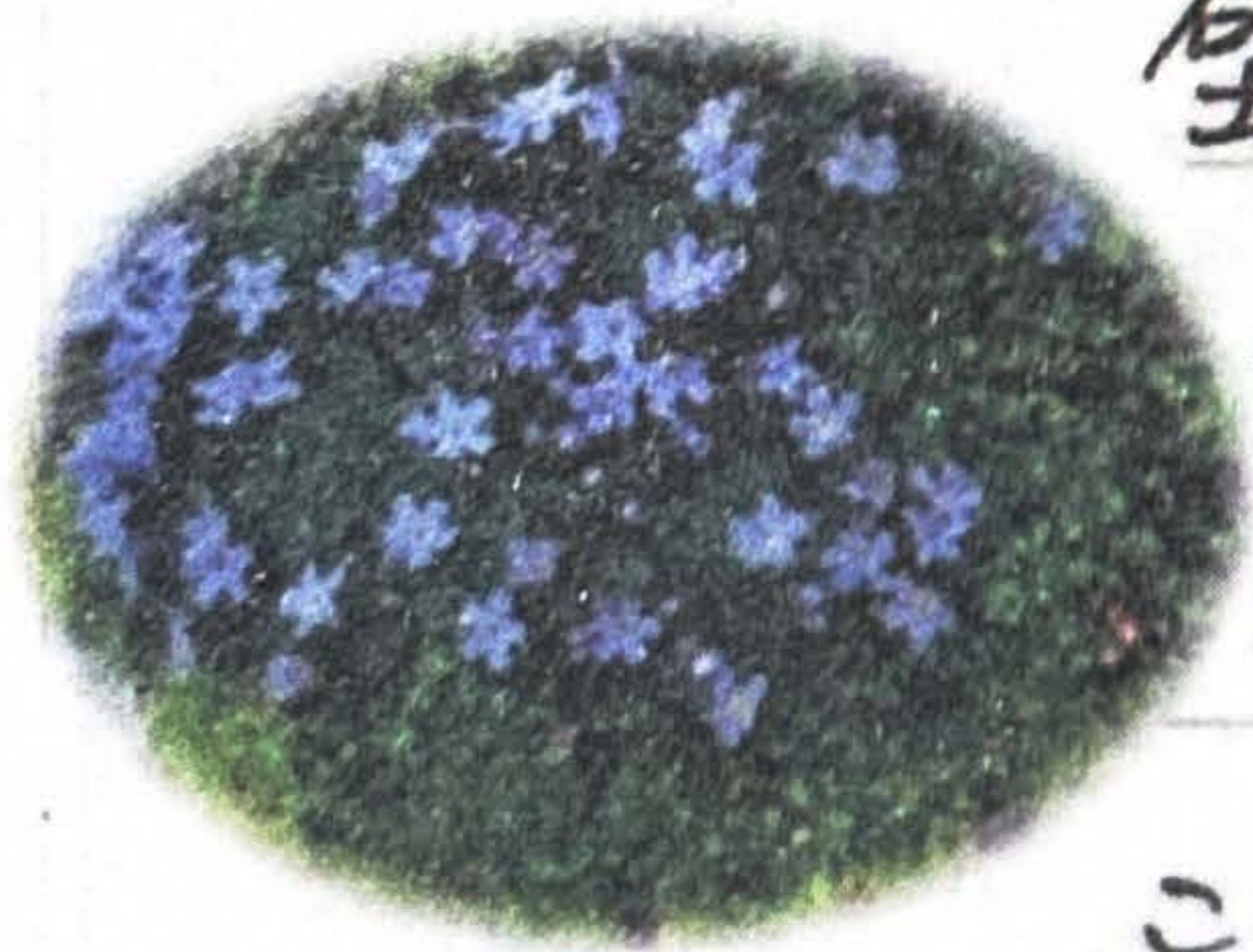
横山聡子

ご献体者様ご遺族様から届いたお手紙

ご献体された秋山ミツ子様から届いた
闘病中のお手紙に綴られた決意・・・

3年前悪性腫瘍の治療を終え、毎に
すこすこましかに。2013年12月、再発して
ことと告げられました。でも私は何も恐
るはしません。10月に慰霊祭に出席させて頂
いた折、若き医学生の皆様が抱負や献体に
後悔の無いお祈りの言葉を伺い、安心してお祈
り致しますことと確信しました。

人命を預かる若き皆様にとて大のんた
ことと思っております。こころから信頼して
人間としてお祈り下さい。患者にとて
人の一言一言が救いであり、薬はかぎりなく。



壁に叩きつけることもあらずと思
いますが必ずや、差進して下さるか
若き皆様の行く先には幸多き
ことと祈ります。

母

望んだ

献体

娘は

その凜とした生

か

大きな誇り



『お母さんへ』

お母さんからのメールと留守電、消えないように大切に残してあります。

だけど亡くなってから一度も見たり、聞いたりしていません。

どうしてかな・・・見たくてもみられない、聞きたくても聞けないです。

最近、『お母さん』って言葉をもう言えない事をとて淋しく感じます。

人に話す時の『母が・・・』とか『親が・・・』とかではなく『母さん』って言葉。

お母さんはいつも周りの人に「秋山さん、秋山さん」と言ってもらえる人でしたね。

入院中も毎日色々な看護師さんが声を掛けに来てくれていましたね。亡くなる前日には故郷から届いた美味しいリングゴをたくさん皮をおいて切りわけ病室に看護師さんや先生方に来て頂き、リングゴパーティーを開いて皆にお礼の気持ち伝えていましたね。

娘の私が言うのもおかしい話ですがステキなお母さんだったと思います。

そんなお母さんの姿を見て育った
私ですから、少しでも近づきたいと
思っています。
星のきれいな夜は星を見てお母さ
んに話しかけています。
お母さんがそうしていたよう
に……

靖子（秋山ミツ子様長女）



『父 管野宣の献体に際して』

父が大変お世話になり有り難うございました。

教員であった父にとって最後の生徒さんと共に五ヶ月間の勉学ができたこと、父も喜んでいたと思います。

昨年父とのお別れ会に参加したひ孫も今は二歳八ヶ月となり、自分の意志を伝える事が出来るまでに成長して来ております。

人は生まれて何時かは必ず死に至ります。その過程では嬉しい事、楽しい事、辛い事、悲しい事、いろいろ

ろ経験します。

その中で成長し進んで行く事が大切と考えます。

皆さまに於かれましては、医学の道に進む高い志を持たれ大変であり、立派だと尊敬しています。

予習↓実習↓復習、毎日勉強に辛いかと思いますが医者となる希望を達成するのはあとひとがんばりです。

そして医者になってからはもっと大変かと思いますが、まずは一步一步進んで行ってください。

私も東海大相模高校から東海大学

工学部を卒業し、現在はプラント業界の会社員として仕事をしております。

設計部門にて仕事をしているので、特に石油化学プラントの設計後の装置試運転は毎日不安であり、爆発、火災事故などが生じた場合はその対応に大変です。

そのために、部下には教育・指示徹底・設計再確認に努めております。又、弊社の社員が数年前にアルジェリア・イナメナスでの天然ガスプラント建設の際に武装勢力により数名亡くなりました。

どんな所に危険が潜んでいるか予想は出来ませんが、心配ばかりし

ていても先には進んでいきません。何事も前に前に前進し、そして老若男女すべての人たちに頼られる親切なお医者さんを目指して頑張ってください。

管野亮介（管野宣様次男）



石川貴将さま、伊藤圭祐さま、飯田
玲美さま、江口祐介さま、駒井沙紀
さま

初夏のような日の翌日は真冬とい
うこの頃の気温の変化も春待つ
日々の試練でしょうか。

皆さまにはお変わりなく医学の学
習に励んでいらっしやることと思
っております。

先日、前川信子茶毘の折り、皆さま
のお手紙を頂きました。献体もそれ
に伴う解剖なども全く門外漢の私
には、思いもよらないお手紙を頂戴
して、驚きと嬉しさで何回も読ませ
ていただきました。今もまた読み返
したところですよ。

教科書だけでは学び得ない人体の
仕組みが想像以上に複雑で、心が折
れそうになったこともあると書か
れた飯田さん。一人ひとりの人体の
違いを知り、医師になった時の対応
を学び取られたとの駒井さん。医療
現場におけるチームワークの大切
さと医師としての根源的なことを
学んだとの江口さん。人体に関する
知識だけではなく生命に対する倫
理観にも思いが至ったとおっしや
る石川さん。この半年間、前川と直
面しながら、献体してくれた方の期
待に応えられるか不安と挫折しそ

うな気持ち、でもそれを糧にして努めてきたとの伊藤さん、それぞれが丁寧にお気持ちを書いて下さって、拝見しながら自然に頭が下がりました。

伊藤さんのお手紙に「優しそうなおばあちゃん、薬指の指輪から生前の前川信子さんに思いをはせました」とありましたので、すでに解剖も終わり、次の勉学に励んでおいでの皆さまに言わずもがなのことと思いつながら、前川信子の生前に一言触れさせていただけします。

夫は県立高校の教師で、亭主関白？前川は古きよき時代の日本婦人の鏡のような優しい人で、夫によ

く仕えていました。大阪に生まれ、六人きょうだいの長女で、父親は大学の薬学の教授でした。

親族には薬学を学んだ者、製薬会社勤務だった者が多く、少し皆さまと関係があるかなという気持ちもあります。

皆さまの祖母の年齢になる私からすると、残念ながら皆さまが医師として巣立たれ、第一線で活躍されているお姿を見ることはできないかもしれませぬ。

でもお若い皆さまがこんなに真摯なお気持ちで、医学の勉強をしていらっしゃることを直接知ることが

でき、とてもうれしく思っています。今は若さの持つ命の溢れるような輝きの時ですが、これから長い人生の中では、真摯な気持ちに水をさされたり、挫折を味わうこともあるかと思えます。でもどうぞ今のお気持ちを忘れず、健康に留意なさってお励み下さいますよう切に祈っております。

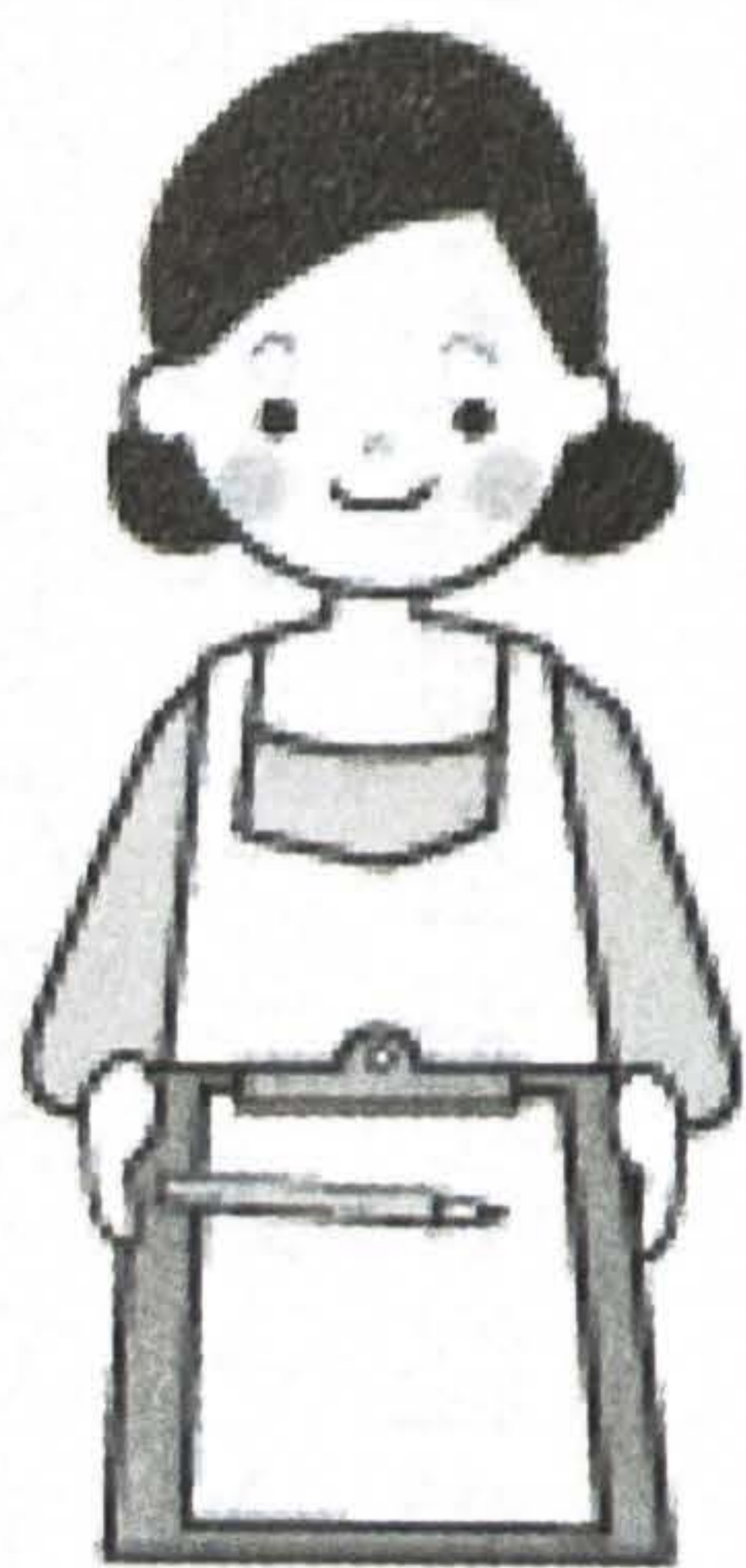
皆さまならきつと患者の心に寄り添ったお医者さまになってくださることと大いなる期待も寄せております。

石川さま、伊藤さま、飯田さま、江口さま、駒井さま、本当に有り難う

ございました。

お棺に納めるところまでしていただいたことも初めて知りました。前川信子も皆さまのような学生さんに最後を委ねたことをきつと満身に思っていることでしょう。東京におります私が遺族を代表して厚く御礼申し上げます。

村上節子（前川信子様 義妹）



『私の母 井上アイ子』

東北で生まれ、両親を病気で九歳で失くし、兄と弟と三人、祖母に育てられ、わずか十四歳で、神楽坂の芸者の置き家さんに入り、修行して芸者になり、青春時代は、戦争一色だったと聞きました。

好きな人も戦死し、辛い日々を、それでも芸者として、凜として生きていたと置き家のおかみさんから伺いました。

そのおかみさんの仲介で、井上五一と見合いし、五一さんの先妻さんが

残していった二人の女の子がとてもなついでてきたのが、五一さんと一緒になることを決心させたそうです。その当時、羽振りの良かった五一さんは、立川で大きな建設会社を経営していました。

嫁いだアイ子さんは、急に、二人の子持ちとなり、大所帯をたくさんのお手伝いさん達と切り盛りし、一年後に私(望月一恵)が生まれました。

姉達も私を可愛がってくれ、ずーっと大きくなるまで異母姉妹とは思いませんでした。アイ子さんがわけへだてなく育ててくれたからでしょう。

それからしばらくして、父の事業の

失敗で全国を点々とし、東京に戻り、再興した会社は、数十年の間は、うまくいきましたが、韓国人の保証人になったのをきっかけにまた失敗。今度は、都内を点々、神奈川県秦野市に落ち着くまで、アイ子さんは、糖尿病が悪化する五一さんを支え、どうやって用立てたのか、娘三人を嫁がせ、質素な生活していました。

そして、糖尿病で倒れた(脳梗塞)五一さんの入院先が東海大病院でした。アイ子さんは、毎日、父のもとに通い、わがままを全て聞き、夜遅く、運転して秦野の住まいに帰る生活を

五ヶ月続けました。もうすぐ、箱根のリハビリ施設へ夫婦で行くことも、東海大の先生方が手配してくれていた矢先に亡くなりました。アイ子さんは、入院中、わがままな五一さんを、ずっと優しく見てくれた先生・看護師さん方への感謝を『献体』という形で、あらわしました。

昭和六十二年四月のことでした。

一人になったアイ子さんは、実の娘である私の近くに縁あって間借りしたのをスタートに二十七年間、娘と最愛の孫のため、愛犬のため、地域猫のため、優しく皆をフォロー

し続けてくれました。

アイ子さんは、同年輩の人より、私の学生時代の友人達や孫の同級生達の母親等、とにかく若い人と一緒におしゃべりし、旅行し、着付けの先生として、楽しい時間を過ごしました。

最後の十年は、私の主人が、アイ子さんへプレゼントしてくれたマンションの六階で、富士山を拝み、雲を眺め、花火を楽しみ、人生で一番、自由で穏やかな時間を過ごしました。

アイ子さんが、ベランダで洗濯物を干していると、大声で私が「アイ子さーん」と叫べば聞こえる程近い住

まいでした。

毎日、犬の散歩をしてランチをし、夕食を届けるという生活が平和に続きました。父の墓参りも大好きでした。

そして、私のマンションの人達、アイ子さんのマンションの人達からも「アイ子さん」と親しまれ、アイ子さんは自分に出来る事は何でもしていました。

次第に八十八歳を越えた辺りから、骨折したり、眠剤を多量服薬したり、物忘れが出てきたりして、アイ子さん本人が一番、不安だったと思います。

八十九歳の夏、電子レンジから白煙

が立ち上がり、消防車、はしご車、パトカー等が駆け付けける騒ぎをきっかけに、シニアホームへ自ら入居しました。

いつも、どんな時も、決断が早く、締めも早く、シニアホームが「終の棲み家」と言っていました。

私の方がメソメソとシニアホームへ一日おきに通い、おしゃべりやランチをして帰る日々でした。

アイ子さんは最後まで、ホームの方々にも迷惑をかけないという姿勢を崩しませんでした。

そしておとしの九月、あまりに腰や足に痛みが強そうなので整形外科を受診し、入院しました。骨盤が

折れていて「よく、頑張ったね」と先生に驚かれた位、我慢強い人でした。そんなアイ子さんも、年とともに、食事は減り、呼吸も浅くなっていたせいか、入院三日目に心不全、四日目に意識不明、五日目に旅立ちました。最後まで、潔ぎ良い人でした。

その短い入院生活中、私の友人たちが毎日、見舞ってくれ、孫家族らも毎日、駆けつけ、話したり、手足をさすったり。

大好きな人達に囲まれ、大好きなまぐろ寿司を食べ、里イモの煮物を「美味しいネ」と笑い、美しい顔でスーッと息をして旅立ちました。

その後は、東海大へ向かい、皆様と会えるまでの一年を待ち、ようやく献体として、学生の皆様の勉強の役に立て、本望だったと思います。

アイ子さんは、いつも、「お天道様が見てるからね」と言い、怒ることは一度もなく、どんな辛い境遇になっても、そこを乗り越え、周りの人に感謝され、愛された人でした。息子の友達も自分の孫のように可愛がり、誉めて接していました。息子は自分の結婚式で、母である私にはではなくアイ子さんに感謝の言葉を述べ、手を取り合って式場を出て行ったほどの「アイ子ちゃん子」

でした。

今でも息子の友達みんな「アイ子バァーバ」と言って慕ってくれています。

もっとアイ子さんの昔話を聞いておけば良かったとつくづく思います。

ファッションも若者と同じシヤカパンにトレーナーが似合う不思議な人で、父が亡くなったその夜に、白髪になってそれがまた美しいと言われる人でした。

出しゃばらず、動物や子供を愛し、なんと私が六十三歳になるまで、ずっと一緒に居てくれたことが奇跡のような人でした。ひ孫にも会えま

した。

あっさりしているアイ子さんは、今頃、天国で夫や娘や、アイ子さんの兄弟、両親、祖父母達と、プカーツとたばこを吹かし、大好きな日本酒をチビリチビリとやりながら「一恵も、ガンバリなさいよ」と下界を見て、言っているような気がします。特に、青空に白い雲が舞っていると、「アイ子さんだア」と思います。白い絹の着物を着て、薄化粧をして旅立ったアイ子さんのきれいな顔を見た瞬間で、想い出はストップ。いつまでも、私の中で、最高の母、親友、娘(最後の一年位は私が母の立場でした)で生き続けています。

遅い親離れ、子離れをし、来月、遺骨になって帰ってくるアイ子さんに、不在だった一年半の間の出来事を報告しなくちゃと思っています。「アイ子さんを偲ぶ会」で、また、たくさんの友達に集まって頂き、アイ子ちゃん話で盛り上がりたいたいと思っています。

皆様、大変お世話になり、ありがとうございます。うございしました。

慈覚妙愛大姉

粹生院妙愛行徳信女

人気者のアイ子さんは戒名も二つです。

望月一恵 (井上アイ子様長女)

学生の皆様方へ

遺族としてひとこと御礼を申し上げます。

母 詫摩治子の納棺をお取り行い
くださいますして、誠に有り難うござ
いました。

実は医師でありました私の父も二
十五年ほど前に東海大学に献体を
させて頂きましたが、

母は、父に倣い少しでもお役に立て
れば嬉しいと常日頃申しておりま
した。

皆様のお陰で、母に「無事に希望が

叶えられましたよ」と報告出来ませ
ことは、本当に嬉しく存じます。母
の主治医は、「自分もあの様に息を
引き取ることが出来れば幸せです」
と言っていました。まさに百一歳
の大往生でございました。

母は赤痢菌を発見した志賀潔の三
女でございます。私も祖父からは、
終生の師であった北里柴三郎のこ
と、交友の深かった同郷の野口英世
のことを良く聞かされました。赤痢
菌の発見に使った顕微鏡を見せて
くれた記憶もございます。

母がまだ元気でおりました八十二
歳の頃、初めての海外旅行に連れ出
し、かつての私が勤務しましたロン

ドンからパリを一回りしたのも昨日のような気がいたします。

熱海の施設に見舞いに行くと、帰りしなに、何時も「この次も東京の美味しいケーキをお願いします」と「美味しい」に特別念を押していたのを懐かしく思い出します。

父は神経科医でございましたが、「自分の仕事は人生の素晴らしさを感じられない人を少しでも減らすことだよ」とよく申しておりました。

学生の皆様方には、将来色々な専門分野にお進みなることと存じますが、その過程で、斯様な形で僅かでも皆様方のお役に立てたとすれば、

両親は心の底から喜んでいてと思います。

改めて篤く御礼を申し上げます。

詫摩武雄（詫摩治子様長男）



あとがき

昨今、世界各地で起こる自然災害での犠牲者、欧米各地で多発するテロ事件で沢山の尊い命が奪われ、そのおびただしい数が、毎日のようにニュースに流れていきます。そのような報道が日常化してしまっただけで、どんなに悲惨なニュースをみても、死者の数を認識するだけになってしまい、そこに生きた人の思いを考える機会が少なくなっただけではないかと思えます。

本学では解剖学実習終了時に、学生諸君がご遺族様・ご献体者様宛にお手紙をいたしました。実習で『人の死』に向き合い、『命の尊さ』から多くを学び、実習を通じて、一人の死者の周りには悲しみを背負う人が何倍もいること改めて認識したことなどが綴られています。

またご家族にとっては故人のご遺志である『献体』という決断に対して同意・協力されたことによって『未来への希望』を見出された・・・その数珠玉のような連鎖がこの文集の発行に繋がりました。

冒頭の挨拶にもありました解剖学科目責任者の『尊い貴重な時間』を十二名の学生と五名のご遺族様、そして苦しい闘病生活の中にも本学に期待を寄せてくださった会員様のお手紙を掲載しました。この冊子が献体啓蒙活動の理解を深め、医学教育にお役に立てることを願っております。

なお、医学生・ご遺族様のお手紙すべてが玉稿であり、どれをも掲載したかったのですが、書面の都合上、その一部を掲載させて頂いております。また出来る限りの原文としましたが、割愛させて頂いた部分もありますことをご了承ください。

この文集の編集にあたり、原稿のタイプ・レイアウトをしてくださった生体構造機能学事務の丹尾優香さんにはこの場をお借りし感謝申し上げます。

発行日 2016年10月1日

編集者 遠藤 京子（東海大学医学部献体事務室）

発行責任者 坂部 貢

（東海大学医学部長：解剖学科目責任者）

発行所 東海大学医学部解剖学

〒259-1193 神奈川県伊勢原市下糟屋 143

電話 0463 (93) 1121